

バリ島天女の舞にみる人と仮面の関係

吉田ゆか子

よしだ ゆかこ / 日本学術振興会特別研究員 (国立民族学博物館)、AA 研共同研究員

仮面は「ものらしくないもの」である。

バリ島のある寺院のご神体である天女の仮面とそれを祀る人々の関わりに注目すると、人と仮面（そしてその先にいる神格）間の関係性の多面性や可変性が見えてくる。

仮面から考える人との関係

仮面は「ものらしくないもの」である。バリ島のある仮面舞踊家は、仮面は野生動物のようなものであり、それを（使い込むことで）飼いつねらなければならないと語る。また、別の演者は、他界した父親が生前使用していた仮面を「躍らせてみたい」と考え、仮面劇を学び始めた。さらには、ある仮面は霊的な力を持ち、人々に安寧や災いをもたらし得るとされ、寺に祀られ繰り返し供物を捧げられている。このように、バリ社会の文脈に限ってみても、仮面は単なるもの以上の存在である。ものによって人の行為や感情が引き出される状況を、ものの働きと呼ぶならば、仮面は様々なやりかたで人間に働きかける。しかし一方で、仮面はものでもある。バリ島の木製の仮面は、人によって作られ、どこかに置かれ、持ち運ばれ、再加工されたり、また複製されたりもする。

実は、各仮面の種類や、個々の来歴、置かれた社会的な文脈によって、仮面とそれを被ったり所有したりする者との関係性はかなり異なる。今回は、バリ島に現存する仮面のなかでも特別に古いとされる、ケ

テウエル村のパヨガン・アグン寺院のご神体、天女の仮面一式、そしてそれらの仮面を用いて踊られる「天女の舞」（バリでは *topeng legong*, *sang hyang legong topeng* などの名で知られる）を事例とし、人と仮面の関わりが、「人が仮面を作り、それを被る」という一方的なものではないことや時をへて変わりゆくものであるということを見てゆく。

天女様がお踊りになる

バリ島は、インドネシア共和国に位置する愛媛県ほどの大きさの島である。イスラム教徒が約9割をしめるこの国にあって、バリ島は人口の8割以上がヒンドゥ教徒であるという特徴がある。観光地としても名高いこの島は、様々な芸能が伝承され創造されていることでも知られている。それらの芸能は、ヒンドゥ教徒たちの催す各種の儀礼、すなわち寺院祭、結婚式、葬式、削齒式などで上演されるほか、観光客向けの芸能ショーや、芸術祭、選挙活動の人寄せなど、世俗的な目的で上演されたりもする。

天女の舞は、このバリ島の南部に位置するケテウエル村とその隣のレンベン村のみに伝わる珍しい演目である。この舞は、もともと寺院の祭や、悪霊払いの行事で上演されていた。ケテウエル村の場合、パヨガン・アグンのご神体である天女の仮面をつけて、地元、初潮前の若い少女たちが踊る。仮面は、全部で9枚あり、一つ一つが固有の名前をもち、高度に神聖視されている。仮面が舞に登場することで、寺院祭が成就したり、村が悪霊から守られたりするとされる。

天女の舞が上演されることを、ケテウエル村の人々は「天女様がお踊りになる (*tu dari masolah*)」あるいは「天女様がお出になる (*tu dari medal*)」と表現する。ここでは、「仮面」を被った少女たちが踊るというよりも、天女様が少女たちという、「仮の胴」を獲得して、舞っていると聞いたほうがふさわしい。

この仮面には、いくつもの禁忌がある。たとえば、仮面は滅多なところに置いてはならない。バリでは上は浄、下が不浄なる方向である。そのため、仮面は必ず高いところにかざして持ち運びされる。また人々は直接仮面を触ることもできない。踊り手

天女様の仮面を装着する。2011年7月11日撮影。



天女様の仮面の入った箱(右)を持ち運ぶときには頭に載せ、傘を掲げる。2007年7月10日撮影。



ケテウエル村の天女の舞が芸術祭で上演されているところ。2007年7月10日撮影。仮面はご神体の複製である。



複製の「子天女様」が儀礼で舞っているところ。2012年6月27日撮影。



寺院での上演前に僧侶がレプリカの仮面と、その背後にあるオリジナルの仮面に祈りを捧げる。2012年6月27日撮影。

も、それを手伝うアシスタントも、小さな白い布を携帯し、この布ごしに仮面に触れる。仮面の裏側に突起があり、それを噛むことで踊り手は仮面を顔に固定する。上演時に万が一仮面を落としてしまえば、再び仮面を清浄な状態にするための大規模な浄化儀礼が必要となるし、仮面自体が破損する可能性もある。そのため、仮面の取り扱いには細心の注意が払われる。くわえて、天女の仮面を被る者は、牛肉、豚肉、乳製品、酸味の強いものなどを口にしてはならないとされる。また彼女たちは、洗濯物を家族とは分ける、汚い言葉を発しない、などの方法によって自らの清浄さを保つ。

また仮面（天女様）は、被り手を「選ぶ」という側面がある。他の舞踊は上手に踊りこなすのに、天女の舞の振付は、いつまでたっても習得できない者もいる。また、舞を習得したものの、仮面をつけることが怖くなり、辞退する少女もいるという。こういったことが起きる理由を、周囲の人々は、彼女たちが天女様に「選ばれていないから」であると捉えている節がある。

以上のことから、天女の仮面が、これを祀ったり装着したりする者たちに対し、多様な事柄を要求しているのだと理解される。人々は不適切な取り扱いや行いをして天女様の怒りがかつたり仮面を穢してしまうことを恐れ、またこれを被れることを光栄に思ったりする。ちなみに、これらの事態を、もの（仮面）が人に働きかけているのではなく、そこに宿る「神格としての天女様」が人に働きかけているのだ、と見ることもできるであろう。しかし、その神格の存在は、仮面と踊り手たちとの身体的な関わりや、人々が仮面をうやうやし

く取り扱う姿によって、はじめて可視化されたり実感されたりするという点は重要である。神格（天女様）の在り方は、仮面というものとそれをめぐる人々の営みに依存しているのである。たとえば、落ちれば割れてしまうかもしれない木製の仮面のはかなさ、幼い被り手たち、口だけで支えたり、布ごしにつかむといった繊細さを必要とする取り扱いといったように、天女の舞の上演にはものと身体に関する、ある種の危うさや難しさが含まれている。そのことによって、神格としての天女様と人々の良好な関係自体も、当たり前ではなく、常に細心の注意をもって維持すべき、文字通り「有り難い」ものとなっているのではないだろうか。

仮面を複製する

ところで、人々がこうしたご神体の仮面をめぐる禁忌や困難から逃れ、より自由に扱える仮面を手にとろうとしたこともある。仮面の複製という出来事がそれである。このことについて、最後に短く紹介する。

天女の舞は、1988年に、全島規模の大きな芸術祭に招待された。この時村人た

は、神聖なご神体の仮面を芸術祭で用いることで、仮面が「汚染」されてしまうことを心配したという。たとえば、芸術祭の行われる会場では、様々な人の出入りがある。なかにはバリ・ヒンドゥ教上は穢れと見なされる、月経中や喪中の者たちも含まれているかもしれない。村で大きな集會が開かれ、ご神体のレプリカを作り、こちらで代用することが決定された。こうして、ご神体の仮面を穢すリスクをおかさず、儀礼以外の様々な場で天女の舞を上演することが可能となったのである。

しかし、このレプリカ作製には後日談がある。実は、その後レプリカの仮面が必要となるような世俗のイベントに天女の舞が招待されることは稀であった。そうしたところ僧侶は、長期間しまい込んでおくのは「可哀想」だと、レプリカの仮面を儀礼での上演でも用いるようになった。このレプリカの仮面は現在「子天女様」と呼ばれることもあり、ご神体に準ずる存在になりつつある。このように、仮面の役割や意味づけは、作製当初の人々の意図からずれたり、変化したりしうる動的なものでもある。